

角野いづみ × 小柳隊員 / まにわのおしごとざかん / 真庭今昔物語 (北房些部商店街)

つれづれなるまきによしはら / ジビエカー解体伸書 / はじめまして、新隊員です / etc...

ジョジョ

「ピカネ」

Vol. 2

真庭市地域おこし協力隊
×
真庭のパーティ達



真庭市地域おこし協力隊通信

Special interview

〇〇〇〇×協力隊員



真庭市地域おこし協力隊 小柳堅策

×

角野いずみ NPO 法人オレンジハート 理事

～「食」が紡いだ縁～

今回が3回目の開催となる「みんな食堂 街スパKIDS」
この街スパKIDSの運営をするお二人、
NPO 法人オレンジハート理事の角野いずみ氏と
真庭市地域おこし協力隊の小柳隊員にお話を聞きました。

―街スパKIDSはどういった活動ですか。

小柳 スパイスの特性を活用して、地域の高齢者のみなさんをスパイスで元気にしよう、と始めたのが街のスパイスプロジェクトでした。そこからの派生で子ども達もスパイスの力で元気になってほしい、と始めたのが「街スパKIDS」（以下、街スパキッズ）です。子どもも大人もみんなが来れる場所、というのが街スパキッズの目指すところです。

―提供する料理のメインはなんですか。

小柳 基本的にはスパイスを使用したカレーを提供しています。サラダとデザートを用意ドメニューとして、なるべく毎回違うメニューを提供できるようにしています。

角野 子どものころからスパイスやハーブを食べる習慣を身につけるといえるのは、食事の幅を広げ、味覚も育っていきます。調味料の辛い甘いで味を覚えるのではなく、素材の味で味覚を覚えていくことは子育てに非常に有効だと思っています。街スパキッズの成り立ちは健康のために、そして子ども達の将来に向けて有効だと思っています。

―3回目の開催までに何か苦労することはありましたか。

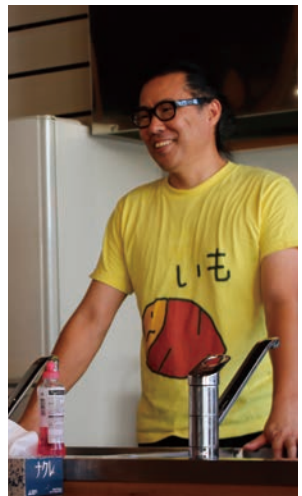
小柳 会場を見つけることはとても悩みました。色々探す中で、多くの方から「風曜日さーんがいいのでは」と話をもらい、紹介してもらいました。アクセスや施設設備のことを考えると非常に素敵な場所です。

角野 誰か津山にもこんな素敵な場所を作っ

てくれんなあ（笑）

―角野さんご自身の現在の活動と今の活動に至る経緯を教えてください。

角野 仕事は津山市で学童保育の指導員をしています。学童保育の指導員をする中で、子育ての喜びや課題を考えながら、津山市でNPO 法人オレンジハートを9年前に立ち上げました。当初は発達障害の子どものための居場所作りをしたいと思っていましたが、実際は不登校の子ども達を預かることが多くなりました。そんな子ども達と一緒に生活する中で、一番に思ったことは「生きること」でした。また、不登校の子ども達と年齢の離れた私が何で繋がることのできるのか、と考えたときに「食」だと思い、子ども達と一緒に「ご飯」を作り、オレンジカフェというのを始めました。作ったご飯を自分たちだけで食べるのはもったいないから、せつかなら街で仕事をしているお母さん達にも食べてもらいたいと思ったのが今の活動のはじまりです。そこからフードバンクの活動も行うようになり、頂いたもので献立を決めて、ご飯を作るようになりました。その次に地域の高齢者の人達とご飯を食べる活動を行い、一年以上地域の人達との関わりをもちました。美作大学の学生さんたちにも協力をしてもらいました。活動を行っている中で、「子ども達にも食べに来てもらいたい」と学生さん達から声があがり、だったら自分たちなりに「子ども食堂」をやってみようか、ということで子ども食堂を平成28年に立ち上げました。



—真庭で活動しようと思ったきっかけはなんですか。

角野 真庭は私の故郷なんです。私は故郷が大好きで、故郷を想う気持ちがとても強いんです。若者が社会に出て、都会に出てても、故郷を想い、故郷のために何かをしたいと思う、そんな子ども達を育てたいと思った時に、やはり学童期から地域と繋がった遊びや活動をたくさん経験していったほうがいいと思いました。現在、津山で活動をしている中で、子ども達と地元のお祭りに参加したり、地域の人たちと活動をしたりするときに、ふと真庭の子ども達はどう過ごしているのだろうかと思いました。意外と困いの中だけで過ごしている子が多い、という話を聞き、残念だと思いました。私自身は学童がない時代に大きくなって、親は仕事でほとんど家にいない中で、学校から家に帰っている最中に地域の人たちが、「おばあちゃんはどここの畑におったで」「おじいちゃんはどうだったよ」というふうに普通に声をかけてくれて、地域の人たちに支えられて育ちました。自分を育ててくれた故郷を愛しているからこそ、真庭のために自分の経験を生かして、お助けできないかという気持ち、恩返ししたいと思う気持ち

です。今までやってきた活動が何かの役に立つなら真庭で活動をしたい、と思いました。

—小柳隊員に最初に会った印象は。

角野 最初、子ども食堂の話で小柳さんにお会いした時は「小柳さんは大都会から来た人だから、緊張するなあ」と思いましたが、実際は緊張しませんでした。印象的だったのは「スパイスで街を元気にする」というところから、私は「食」というものにこだわっているから、繋がる部分がたくさんあるだろうなあと思いました。私自身、薬膳に興味があり、薬効のある植物で生活をして、健康が維持できたら最高だなと思っている中で、スパイスの特性を活用し、健康という部分に着目し、活動に取り組んでいる小柳さんの話を聞くうちに応援したいと思い、一緒に何かやりたいと思いました。街スパキッズやフードバンクの活動でも健康的な食事を一緒に提供していきたいと思いました。小柳さんはとても好印象でした。

小柳 ありがとうございます。角野さんの事は会う前から楽しい人だと聞いていました。実際会ってみると確かに！と感じました。私



は初対面の人と色々話すがあまり得意ではないのですが、角野さんとはたくさん喋れました。構えなくても大丈夫な人だと感じ、初日から長時間話をする事ができました。昼頃に会って、夕方まで喋りっぱなしでしたね（笑）

—それぞれの活動の今後の展望について教えてください。

小柳 子ども達が自然の物の味を知って、親御さんがその健康効果を知る、親子で元気に健康になれるような活動にこの街スパキッズがなるといいですね。そして何よりも私は子ども達が好きなので、みんなとワイワイやる活動になれば嬉しいです。街スパキッズはずっと続けていきたい活動です。子どものころに通っていた子が将来、大人になって戻ってきてくれたら涙が出ちゃいますね。そんな活動になるように頑張ります。

角野 それ、最高だね（笑）社会になかなか出られない若者が生きるために繋がる「食」、和みの場でもある「食」をきっかけに街スパキッズやフードバンクを通して、素の自分を出し合って語れる場を作りたいと思っています。子育てに関しては、困ったなとか助けて欲しいな、と気軽に言える街づくりをしたいです。自分一人で悩み、苦しむのではなく、助けてほしいと思った時に、気楽に行けて、色々な人が集まっている場を仲間達と一緒に作りたいたいと思っています。子育ては永遠に続くものだから、その時代の子育てを支える仲間がいつもいる、そんな街づくりをしていきたいと思っています。

角野 いずみ（写真：右）

真庭市中河内出身。NPO法人オレンジハート事務局長。岡山県北を中心に学童保育や子ども、若者の居場所づくり、食品ロス削減活動や子育て支援を行っている。

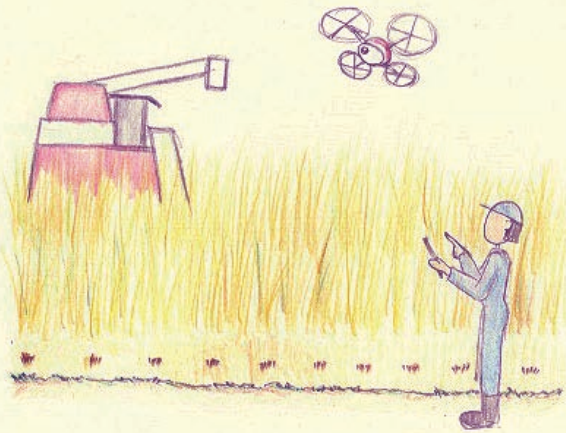
小柳 堅策（写真：左）

新潟県加茂市出身。2019年に真庭市地域おこし協力隊に着任。東京都で飲食業に従事していた経歴を生かし、「食」をテーマにした活動を行う。スパイス香辛料ソムリエの資格を持つ。前職はバーテンダー。



まにわのおしごとずかん

—真庭にもこんなお仕事あったんだ。
真庭にもこんな人がいたんだ。
知らないことはたくさんあります。
おしごとずかんが職業選択の一つになりますように。



まにわのおしごとずかん。人口約四万五千人の岡山県真庭市。この真庭市にもなかなか知られていないおしごとや名前は知っているけど、どんなことをするおしごとなのか知らない、そんなおしごとがたくさんあります。「まにわのおしごとずかん」は真庭市地域おし協力隊が活動をする中で出会った珍しいおしごとや真庭の人も知らないおしごとに焦点をあて、取り上げていくコーナーです。このコーナーから「へえ、〇〇ってこんな仕事なんだ、すげえかつこええな」「真庭にもこんな仕事があったんだ、この仕事やってみてえな」そんな風に思ってもらえると嬉しいです。

第二号の「ヒオネ」を飾る真庭の素敵なおしごと第二弾は……『スマート農業実証プロジェクト』です。

今回お話を伺ったのは、真庭市鹿田でスマート農業の実証プロジェクトに携わっている、松原加都江さんです。スマート農業の実証プロジェクトでどんなことをされているのか、また、どういった想いでこのお仕事をされているのか、たくさん聞きました。

それではそろそろ参りましょう。

—『スマート農業実証プロジェクト』

このおしごとはこんなおしごとです。

※スマート農業

ロボット技術やICTを活用して、農業の生産性を高め、また、ロボットが作業をアシストすることで労働者の作業負担を減らし、安全を確保する新しい農業のこと。

—今のお仕事の内容を教えてください

農事組合法人寄江原でスマート農業の実証実験のアシストや、農業の初心者と熟練者の比較検証のオペレーターをやっています。具体的には田植え機やトラクターの直進キープのアシスト機能を使用して、熟練者と農業初心者の操作の違いがどれくらい違うのかという比較実験をしています。これは新規就農者への農業への垣根を下げていくためのものだったります。また、事務作業では組合員さんに作業日誌を書いてもらい、それを圃場管理システムにデータ入力したり、ドローンのオペレーターもやったりしています。

—この仕事をやるときのきっかけは

以前は市役所の臨時職員をやっていました。退職のタイミングで職員さんから声をかけてもらい、おもしろそうだなという軽い気持ちでやってみることにしました。でもちよつと甘かったです(笑)。

農業は一筋縄ではない、非農家の家庭で育ったので農業のことは全く知りませんでした。でも知らないと関わっていけない、とにかくなんでも関わって知っていかなければ仕事にならないので、あっちこちの作業に顔を出しました。時間はかかりましたが、知っていくうちにやはり農業は大変であることをやってみて改めて実感しました。私が話していることはもしかしたら農業への垣根を上げてしまうかもしれませんが、本当に大変な仕事です。だからこそスマート農業を導入することによって作業を軽量化できるか、という

ことなので、全力で実証実験を行っています。

—今の仕事に必要な資格は

私たちが実証を始めた当初、ドローンでの農業散布には農林水産省の技能認定が必要でしたが、その後廃止されました。現在ドローンで農業散布を行う場合、国土交通省に飛行の承認をもらわないといけません。その承認には一定の技能と飛行経歴が必要で、そのための講習を受ける必要があります。我々がお世話になっている鏡野のスクールや、最近は勝山にも講習を受けられる場所があるそうです。ドローンの作業内容は主に農業散布、除草剤を散布したり、殺虫殺菌剤を散布したりします。追肥することもしたいのですが、肥料の成分が散布機を壊してしまう恐れがあり、敬遠していました。最近、ドローン専用の肥料を手に入れたので、実験的に追肥散布をやっています。農業散布ドローンにはカメラがついていないので、目視で操作をするのですが、自動操舵機能がついているので、設定をすれば飛ばすだけでドローンが決められた分量を自動散布してくれるようになっていきます。なので、動力噴霧器を背負って行う作業と違い、5分程度で作業が終了できるようになっています。これはかなりの労力の削減になります。これからの農業には絶対に役立つ機械です。ドローンの価格も少しずつ下がってきているので、期待できます。

—この仕事の楽しいところは

農業はここに勤めるようになって初めて挑

戦しましたが、楽しいというか、癒されました。農業には癒しの力があると思います。都会にいたる人が都会の生活に疲れて、田舎に行って農業をしたい、と思うことは無意識に癒しを求めているのではないかと思っています。自分が初めて野菜を栽培して実がなったとき、すごく感動しました(笑)。どんな実が大きくなっていくのは嬉しいし、また次もやりたいと思いました。田んぼだと、生えている雑草が今まではただの草に見えなかったものが、それぞれ種類があり、有効な薬を撒くことで特定の草だけが枯れることが面白かったり、水管理に関しても、自分の田んぼでもないのに水位を見て回ったり(笑)。

やることで達成感があり、それも自分にとっての癒しに繋がっています。生き物を育てる喜びと同じように感じるのが今は楽しいです。暑い中で仕事をすることは疲れるし、ずっと集中してやらなければならぬので肉体労働になります。そういう部分は大変ですが、それを乗り越えた上での喜びが農業にはありますね。楽しみもあり、苦しみもあり。苦しいことも良かったりする。それがないと喜びも生まれないですね(笑)。自分がやっているスマート農業に関して言えば矛盾するかもしれないませんが・・・(笑)。泥臭い事も必要なのかなと。全部を機械化するのではなく、その土地にあわせてスマート農業を取り入れていくことが大事なのかなと思います。

—今の仕事をする前と後のイメージの違い

スマート農業ってきくと、スマートなのか

なと思っていました(笑)。データをババッと管理して、今日は仕事終わり!と管理していましたが、やはりそうはいかないと。覚悟があつて入ったわけではなかったので仕事を始めてからやることの多さに驚きました。

—新規就農者の垣根を下げたいというお話がありました。今後こんな人に農業に携わってほしいと思う人はいますか。

どんな人でも農業に興味があれば、やってほしいです。でもスマート農機具が非常に高額なので、スマート農業と新規就農者を結びつけることはなかなか難しいかもしれません。でも農業に興味がある人はとりあえず農業を始めてみてほしいです。とは言ってもいきなり個人で田んぼを買って、自分流で始めることはなかなかできないと思うので、団体に属する必要があるかもしれませんが、たとえ失敗しても楽しいと思ってもらえればいいですね。

—一緒にスマート農業をされている農家の皆さんと関わっていて楽しいなと思うことは
皆さんノリが良いので、一緒にやっていて楽しいです。また、お願いしていないことをやってくれたり、色々なことを教えてくれたり、非常に勉強になります。

—スマート農業に携わった感想と今後の抱負をお願いします。

とてもやりがいがあります。実証プロジェクトは今年で終わりますが、ここで終わりに

することなく、楽しめる要素がいっぱいあるので、多くの方に寄江原がやっていることを知ってもらいたいです。せっかく関わった仕事なので、良い形にしていきたいです。年齢に関係なく、高齢の方も従事されていますし、スマート農業は一人ですることではなく、みんなで協力してやることで、やっとなことなので、そういう意味ではこれからも続けていきたいと思っています。

くお話を聞いて

テレビやインターネットでも『スマート農業』という言葉をよく目にするようになりました。これまでに日本の食卓を支えてきた農業従事者のノウハウは廃れることなく、新時代に受け継がれていきます。長年の熟練の技と、新しい技術が融合し、スマート農業となり、我々の食卓をさらに華やかにしてくれることを楽しみにしています。

(協力隊 西本浩史)

松原 加都江(マツバラ カズエ)

岡山県真庭市出身。事務職などを経て、2019年に農事組合法人寄江原に就業。スマート農業の事務及び実証実験を行っている。ドローンのオペレーターも担当している。



真庭 今昔物語

2020年
第2号

この企画では、真庭市内の各所の今と昔を比較しながら、歴史的な変遷や当時の様子を振り返ります。昔「巨人」「大鵬」「卵焼き」が話題になったように、さしずめ現在は、「あつ森」「ソロキャン」「ワーケーション」でしょうか。時代の移り変わりによって、その時の流行りは変化します。そんな時代の中にある真庭の今昔を、写真や貴重な資料を交えてご紹介します。

―「皆部商店街」―

真庭市下皆部（しもあざえ）地区にある「皆部商店街」は、「ぶり市」という県内外問わず観光客が押し寄せる320年に及ぶ伝統を持つ北房地区の一大イベントを開催している商店街です。

昭和35年12月1日に皆部の商店会が発足し、「皆部商店街」が誕生しました。前身はもつと前で、大正時代には馬車が行きかうメイン通りとして、そのころからお店が立ち並んでいました。



昭和30年頃の皆部商店街の様子（出典：写真の新田）

昭和通りには、大正時代にはほとんど店や民家はなく、道幅も2、3mしかありませんでした。しかし、道幅が広げられた後、大正の末期から昭和の初めにかけてお店が次々に立ち並んでいき、昭和を代表とする通りだということで「昭和通り」という名称がつけられました。

備中川の河川改修、田んぼの圃場整備、中国縦貫自動車道の工事が行われ、それに伴い桃山遺跡や周辺の古墳

の発掘調査など公共事業の追い風も吹き、皆部の町は一気に活性化が進みました。

皆部商店街の特徴は、商店会員が商売を楽しみ、みんなが集まる魅力的なイベントを考え工夫し、継続してきたことです。

かつては、道路に面した建物はみんな何らかのお店をしており、商店街の中には映画館やパチンコ屋など娯楽施設も何軒ありました。さまざまなお店が入れ代わり立ち代わりに経営がなされていました。



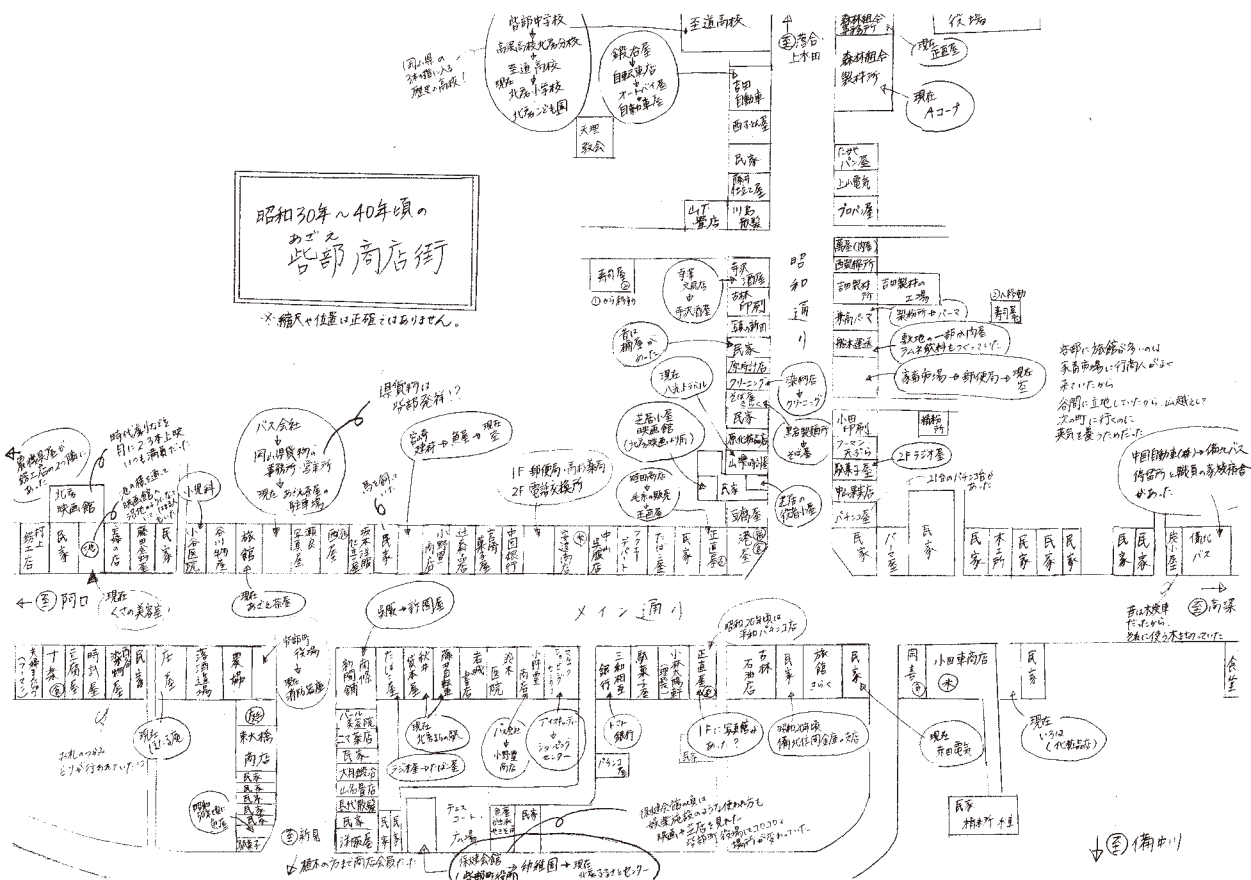
お祭りの様子（出典：写真の新田）



昭和通りでのお祭りの様子（出典：写真の新田）

中には、商売をしたい人が商店街の中の民家や商店の一角を借りて開業し、軌道に乗ったら商店街の中に新しく店舗をこしらえて開店させるというところもありました。

商店会が発足してからは、皆部商店街が一丸となり「ホテル祭り」や「土曜夜市」、「花火祭り」など、たくさんのイベントを開催しました。最盛期には、ホテル祭りの際に遊覧バスを出して商店会員がバスガイドをしたり、6月には毎週土曜夜市をしていたりしました。また、以前は中津井地区の歳の市で開催されていたぶり市が時代とともに皆部商店街に移ってきました。当時のぶり市のくじでは、鰯の他に子牛



今昔物語取材から書き起こした昭和30～40年頃の皆部商店街の地図



現在の皆部商店街と周辺の様子



山から見た皆部商店街と周辺の様子（出典：写真の新田）

次はあなたの地域の今と昔を
振り返ります。

一頭が景品になり、とても勢いがありました。イベントが開催されるときには今なお露店が多く立ち並び、皆部だけでなく北房の町を賑やかにしています。

現在、買い物はスーパーや複合施設で済ませたり、ネットショッピングなどを活用したりと、人々の生活形態が変化してしまいました。多かったころには120人もいた商店会員も今では30人ほどに減ってしまいました。

しかし、ホテルのイベントやぶり市などは工夫と変化を繰り返しつつ、今でも続いています。また、酒蔵の新しいイベントが始まり、ゲストハウスもできるなど、新しい風が吹き始めた皆部商店街に期待が高まります。

（協力隊 橘高七海）



現在の皆部商店街の様子



協力隊の一員となって早1年が経過しました。私、駒場は主にジビエに関する業務を担当しています。ん？そもそもジビエとは何か？ということですね。ジビエという言葉はフランス語が語源となっており、日本語で獣肉（シカ、イノシシなど）を指します。私の活動の一つにジビエカーというものがあります。正式には移動式解体車両といい、獣肉を解体する道具を装備した車両、ということから、ジビエカーと呼ばれています。



これが移動式解体車両、通称ジビエカー

ジビエカーはシカなどを解体する車両で一次処理（皮剥ぎ、内臓摘出）して枝肉にする車両です。
ジビエカーの運用の流れはおおまかに
1、猟師さんからの連絡
2、軽保冷車での引き取り

- 3、解体（一次処理）
- 4、冷蔵保管
- 5、枝肉搬入（美作市処理施設）

このコーナーはジビエカー解体伸書と名付けていますので、数回に分けてジビエカーの解説や私、駒場の活動紹介をしていきたいと思っています。私の活動はあまり表に出ないので、ここぞとばかりに活動の紹介をしていきます！

シカなどを解体する一次処理の工程は、引き取りしたシカを水にて洗体し皮剥ぎ、内臓摘出、枝肉巻包、冷蔵という流れです。この工程を行うためにジビエカーの内部は大きく分けて4つの部屋で構成されています。

シカの洗体および皮剥ぎをするエリア、内臓摘出および巻包をするエリア、冷蔵室に移動するための前室、枝肉を保管する冷蔵エリアとなります。

今回は一次処理の工程の最初の部分、洗体と皮剥ぎを行うエリアについて簡単に解説します。

シカを洗体し、皮剥ぎするエリアの設備の一部として、洗体使用する水道水のホースと高圧洗浄機の2種類があります。ホースと高圧洗浄機の使い分けですが、シカに付着した汚れが取れやすい場合はホースを使用し、汚れが取れない場合は高圧洗浄機を使用しています。洗体と皮剥ぎをするエリア①にあるゲートという部分②はメッシュ状になっており、洗い流した泥や血液などが汚水タンク③に入っていく仕組みになっています。洗体

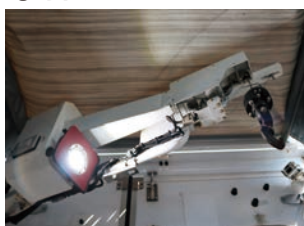
後はシカを電動ウインチ④で懸吊（吊るす）して、皮剥ぎを行うための機械も装着してあります。



①洗体、皮剥ぎをするエリア



③汚水タンク



④電動ウインチ



②ゲートのメッシュ部分

一次処理については他にもまだまだ工程がありますが、一度に全てを説明しきれないので、今回はここまでにします（笑）。

ジビエカーは今年に入ってから昨年よりも多くのシカを処理、解体しています。やはり処理頭数が増えくると大変なところとしては準備と片付けに時間がかかります。各エリアの道具の準備や清掃は食肉としての衛生管理を行うために必要不可欠です。こういう見えない小さな作業の積み重ねがとても大切で、何かと時間のかかるものが多いので、常に効率的な作業をできるように心掛けていきます。次回もお楽しみに！

（協力隊 駒場伸太郎）

つれづれなるままによ／はら

「不動産の取引は都市より 地方のほうがハイレベル…だけど」

前 回、空き家問題ってそもそも何なの？

というテーマの中で、本来、空き家対策とは危険排除のための適切な管理の推進と意識喚起だと書きましたが、特措法の目的はともかく、地域の活性化の観点からは、現実の課題として、使えるものは適正に、有効に使う、ということももちろん重要です。

キーワードは、「使えるものは」と「適正に」ということ。空き家の利活用を図ろう、と言うのは簡単ですが、人の住まなくなった建物を再び使用できるようにするには一般の人が考えている以上の費用がかかります。さらにそれだけのお金をかけても古ぼけた（趣のある古さ、ではなく）印象はいかんともしがたく、いつそ建て直したほうが安いし、良いものになる、なんてことも往々にしてあることです。また、空き家にはたいがい大量の物品が「格納」されており、これを片付けたり処分したりするのも大変です。多大な気力・体力・費用をかけて改修して果たしてそれに見合う賃料等が得られるのか…お宝でも見つければ別ですが。

なんでもかんでも「空き家」とひとくくりにしてしまうのも問題で、既存の建物の利活用、という観点から検討するのであれば、まずその建物が改修によって利用可能かつそれだけの価値があるものなのかきちんと見極めたい。市内外からの転居・移住や店舗・事務所・宿泊施設等といった需要が期待できる品質・立地なのか、またどういう用途に供せばその需要層が取り込めるのか、を判断しなければなりません。余談ですが、地方の人が考える「都会の人間が求めるであろう田舎暮らしの家」と実際に都市部の人が求める物

件はだいたい違って、街の暮らしに慣れた人にとっては、山のなかの自然豊かな一軒家、なんてものよりは近くにコンビニやスーパーがあつて、虫がやたらと入ってこないサツシユの家、当然トイレは水洗…でも周りには山や川や田んぼ、畑もあるよ、という、ほどよく田舎、の環境が最も心地よいのです。もちろん、全部がそうだとは言いませんが、巷にあふれる田舎暮らし情報に関しては少数派へのクロージアアップが多すぎるような気がします。

コロナ関連もそうですが、このあたり、報道の偏重ですね。また、空き家の利活用に関しては必ず対象不動産の売買または賃貸借あるいは使用貸借、運営委託といった契約行為がかかわってきます。

ここで問題なのは、特に賃貸借の場合において、契約書がけっこう雑に作成されている、ひどいときは口約束だけで書面の取り交わしがされていないようなケースがあるということです。不動産の賃貸借において、貸主・借主間でもめるのは、たいがい雨漏りその他の建物不具合、設備機器や配管類の故障といったトラブル発生時と解約・退去時の原状回復についてです。笑顔で「あなたを信頼しているから」なんてスタートするのが一番危ないことで、いざトラブルが起きると金銭が絡むことだけに泥沼化しかねません。後で嫌な思いをしなくてすむよう、最初の段階でしっかりした契約書を作成し、設備等の所有帰属や補修負担等に関しても区分表等できちんと取り決めておくことが大切です。

筆者は30年ほど不動産会社において、そのうち5年間ほどは賃貸物件の企画・運営に携

わっていました。都市部の賃貸住宅の場合、

最初から事業用途仕様で建てられており、さらに借りる側もだいたいは普通の居住用途なので、契約書等も画一的なもので汎用対応できるのですが、地方の空き家の場合はそうはいきません。物件ごとに大きな特性差異があり、さらに貸主・借主ごとに貸したり借りたりする目的がさまざまです。すべてがオーダーメイド契約になるといっても過言ではありません。売買の場合でも案件によっては農地法や森林法や都市部ではあまりお目にかかることのない法令制限も存在して、実は地方で空き家の売買・賃貸に携わるには、都会で仲介等やるよりはるかに高い知識とスキルを要求されるのです。さらに、宿泊施設のように許認可を要する事業用途での賃貸借等、運営委託が絡む契約となった場合…もう一生懸命勉強するしかありません。その一方、宅建業者としての報酬は基本的に取引案件の価格・賃料で決まるため、内容がシンプルなのに単価が高い都市部の取引に比べて地方の不動産取引は宅建業者が負う業務量・責任と報酬が見合っていないのが実態であり、これが宅建業者のモチベーションを下けているのは明らかです。といって、営利は度外視して住民会等の民間組織でやろうとしても、今度は宅建業法の壁があります。その点からも、地域活性化のための空き家の流通促進を本気でやるなら行政が何らかの形で取引実務（ちなみに、地方自治体は宅建業法の適用対象外です）まで踏み込んで主体的に取り組む必要があるのではないかと考えているんです。が…個人的には。

池田将の真庭一年生コラム



ヤモーとモリー

新型コロナウイルスが猛威をふるう7月初旬、東京から真庭へ移住してきました。

周辺住民の方に迷惑がかからぬよう3週間ほど妻と二人、ひっそり生活をしていました。まるで隠居生活のようだな、と真庭のゆったりした空気を感じながら過ごしていると、たくさんの生き物たちに囲まれていることに気づきました。

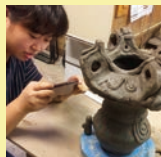
鳥、蛙、セミ、トンボ、蝶、蛾、カメムシ、蜘蛛、ムカデ、ナメクジ、蟻、ダンゴムシ、コオロギ、etc。

昔から蜘蛛が苦手だったので最初はビクビ

クしていましたが、律儀に巣づくりする蜘蛛をコーヒーやビールを飲みながら眺めているとちょっぴり愛着すら感じるようになりました（体に付いてると発狂しますが）。

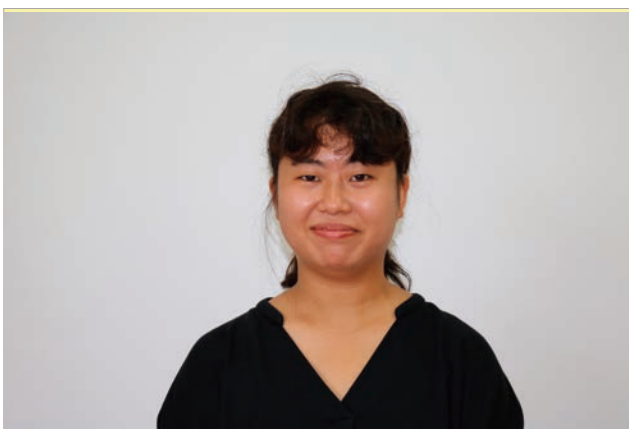
遭遇する生き物の中でもとりわけヤモリがお気に入りです。うちには二匹のヤモリが毎夜同じ場所に出現するのですが、ヤモーちゃんとモリーちゃんと名付けて妻と可愛がっています。人間の気配に敏感な彼らにはなかなか近寄れないのですが、絶妙な距離感で共存している感じが愉快です。

（協力隊 池田将）



こんにちは、はじめまして。令和2年の4月から真庭市地域おこし協力隊に就任しました、橘高七海と申します。広島県出身の22歳です。

岡山商科大学でマーケティングを専攻していました。いろいろな地域にお邪魔して、地元の方と農作物の特産品化を目指す活動をしていました。私のゼミの教授は「生産者と一緒になって畑を耕すところから始めないと、その商品の苦労やストーリーを伝えられない」という考えだったので、大学で勉強をしていた記憶よりも、田んぼや畑で汗を流していた記



橘高 七海 (キッタカ ナナミ)

はじめまして、新隊員です。

憶の方が強く残っています。出来上がった商品はさまざまなイベントに参加して販売し、一人でも多くの人に興味を持ってもらって買ってもらえるように、人一倍声を出して積極的に商品の案内をしていました。

サークル活動では、「博物館研究同好会」に所属していました。大学の講義で博物館学や考古学、民俗学などが学べるのですが、「もっと知りたい」という学生が集まって、博物館巡りをしたり、展示の仕方や展示企画について意見を交わしたり、ワークショップ企画を立てて部内で実施したりと真面目に博物館を楽しんでいました。真庭市との出会いもそんなゼミやサークルでの活動が始まりだったと思います。

協力隊活動では、歴史好きの皆さんと一緒に北房ふるさとセンターの活用増加と北房のまちの駅の宿泊者増加に務めています。体験活動を通して、北房の歴史文化遺産に興味を持ってもらえるようにアプローチをしていきます。そして、私と北房をつないでくれた北房まちの駅に、もっと人が集まるようにコーディネーターとしていきたいです。

よろしくお願いします！



池田 将 (イケダ ショウ)

はじめまして、池田と申します。令和2年8月から真庭市地域おこし協力隊に就任しました。

私は東京生まれ、福岡、兵庫、東京育ちの37歳です。

美術大学で映像を学び、卒業後は映画やCMの制作に従事してきました。

5年前にサンディという映像プロダクションを設立し、煩雑な日々を送ってききましたが、

激動過ぎる東京のリズムに疑問を持ち始めるようになり、昨年12月に移住を決断しました。



なぜ真庭を選んだの？とよく聞かれるのですが、不思議な縁がいくつも重なったとしかいいようがないので、興味ある方にはゆっくりお話をしたいと思っています。人と話すのが好きなので町で見かけたら気軽に声をかけてください（おそらく前世はおばちゃんだと思います）。

協力隊活動としては、市民の方々と連携しながら全世界に真庭をPRできる映像コンテンツを創出していきます。特に映像に興味のある若い人材を発掘し、真庭に適した表現の在り方を共に模索していければと思います。

表現する楽しさが、これからの「ふるさとづくり」をする楽しさに繋がっていければ本望です。

一緒に冒険をしましょう！

ピオネ Pione

「ピオネ Pione」は真庭市地域おこし協力隊員、真庭市交流定住センターが
共同で作成している冊子です。

「ピオネ Pione」は黒ぶどうの一種「開拓者」という意味のイタリア語に由来します。

真庭市名産のピオーネのように真庭市民（パイオニア達）と

真庭市地域おこし協力隊が力強く大きな一房となることを願い、

そして、本冊子を通して真庭のパイオニア達や真庭市地域おこし協力隊の活動が

多くの方に届きますように。

ピオネ Pione（真庭市地域おこし協力隊通信）Vol.2 発行／2020年10月 日

発行元／真庭市地域おこし協力隊 <https://www.facebook.com/maniwa.kyouryoku/>

協力・監修／真庭市交流定住センター <https://i-maniwa.com/area/koryu/>

○本誌からの写真・文などの無断転載を禁じます。

↓真庭の素敵な情報はここから↓



<COCO真庭 ここまにわ>

「真庭の暮らし・人」の掲載サイト。
真庭市内での住まい探し、仕事など
移住支援の紹介もしています。



ManiColle

< マ ニ コ レ >

真庭のイベントコレクションサイト
「週末どこ行こう？」
「何か面白いイベントはないかな」
などなど、情報満載。

